

加藤磐斎著『徒然草抄』

—「卷第八」翻刻—

吉澤 貞人

・前号に引き続き、『徒然草抄』の「卷第八」(第百十四段〜第百三十六段)を翻刻する。

凡例

- 一、本稿は刈谷市立中央図書館蔵本(村上文庫)を底本とした。
 - 一、翻刻に際しては、原本の形をできるだけ忠実に伝えることを旨としたが、文字は印刷の都合上、現行の字体に改めた。
 - 一、底本は、句点も読点もすべて「。」であり、又句読点が施されていない箇所も多いが、適宜「。」を施して読み易くした。
 - 一、濁点の表示は、まちまちであり、不統一な点も存するが、底本のままとした。
 - 一、章段の区分は、通行の区分に従った。但し、『徒然草抄』では、第十段を二分して、「後徳大寺大臣の」以下を別段(第十一)段)としているので、以下通行の章段と一段ずつずれることになる。
- 又第百三十六段の「かしこげなる人も」以下を別段としているので、

以下も通行の章段とずれることになる。

各章段の下に()をつけて『徒然草抄』の章段を示した。

第百十四段(第百十五段)

今出川のおほいどの。さがへおはしけるに。有^{あり}栖川^すのわたりに。水のながれたるところにて。さいわう丸御うしを追たりければ。あがきの水前板までさゝとかゝりけるを。為^ふ則^{のり}御車のしりに候ひけるが。希^けれのわらはかな。かゝる所にて。御牛をばをふものか。といひたりければ。おほいとのお氣色あしくなりて。をのれくるまやらん事。さいわう丸にまさりてえしらし。希有の男なりとて。御くるまにかしらをうちあてられにけり。此高名のさいわう丸は。うづまさどの、おとこ料の。御うしかひぞかし。このうづまさ殿に侍ける女房の名ども。一人はひぎゝち。一人はことつち。一人ははうはら。一人はをとうじとつけられけり。

抄に云。此だんうしをふことにつきてみちをしれるをたうとむへき事を云り。女の名どもの事を終りにかく事はうつまさ殿のうしをすかせ給ふことをいはんため也。一段の用にあらずかゝる筆勢あまたところにある。

今出川のおほいとの 抄にいはいはく。一段のおこりをかきいだしたり。さかへおほするにつき。これ〳〵の事あるよしなり。今出川とは所也。そこに居たまふゆへなるへし。

のつちに云。今出川のおほいとの 菊亭兼季スエ公也。西園寺大政大臣実兼公三男也。

有栖川 のつちに云。歌枕に云。有巢川 わりす 本院の辺 ちはやふるいつきの宮のありす川松とともにぞかけはすむべき 京極前大政大臣 右二条大皇太后宮かものいつきと申けるとき。本院にて。松枝映水と云心をよみ給へるとなん。又はいはく 君まさぬみそちはあれてありす川いむすがたをもうつしつるかな 西行法師 右齋院おりさせ給ひて。本院の前を過けるに。おりておはしましける所へ。女房に申つかはしけるとなん。

一葉抄に。いせの齋宮のの、宮はさがのありす川にあり。かもの齋院の野のみやはむらさきのにあり。

抄にいはいはく。袖中抄。ちはやふるいつきの宮のありす川松とともにぞかけはすむべき 顯云。ありす川は。齋院のおはします本院のかたはらに侍る小川なり。又古哥にいはいはく 音にのみいつきのみやのありす川たふなをかのわたりなりけり ある人はいはいはく。うづまさより法輪へまいるみちにある小川なり。さればさがの行

幸にみつねに。この川を何と云と、はせ給ひければみつねがいはいはく

いさしらずみつねはこゝの有栖川君かみゆきにけふこそはみれ私云。これはひか事也。小野行幸の時。本院の辺なるありす川にて。みつねはこの哥をよみける。

さごろもにおまへにながれたるはありす川となん云ときかせ給ふにも

をのれのみながれやはせんありす川岩もとあるじいまはたえせしあかきの水 のつちにはいはく。足がきの水也。

抄に云。古哥に あをとせずゆかんこまもがなかつしかのまの、つぎはしやすくかよはん これもあしをと也。あがきもあしがき也。足にて水をかくにてある也。

御くるまのしりとは 抄に云。くるまの跡の方にあひのるなり。希有とはめづらしきことをするといふ心也。

童とは 抄に云。釈名ニ云レ児ト。年十五ニ云レ童ト。独也。自七歳ニ止ニ十五ニ皆称ニ童子ト謂レ大和末散故とあれと。年にはよらす。うし追ふものはかしらをわらはのやうにして。いつまでもあるゆへなり。かゝるところとは 抄に云。川の中にてと也。をふゆへに水がまへいたへかゝるとてしかるなり。

おほいとの御気色あしく成て 抄にいはいはく。為則か丸をしかりけるを。御らんして気色あしくなりて。為則をいかり給ふよし也。こゝのこゝろは為則がわがしらぬみちにさしいでたるをにくみ給ふなり。おほいのもさいわ丸も。よくうしのことをしり給ふ人な

ることを。つきにいふにてみれば。川の中にもをふ事なるべし。不案内にて為則がさしいづるとみえたり。かゝることはしらぬみちには口さしいづへきならぬをしへなるべし。

此高名のさいわ丸 抄に云。かくいふ事は。さいわ丸がひかこと、はせぬとのために云也。うづまさどののはうしずき也。当時馬ずきをするたぐひなり。其すきの御内の人にて。しかも料のうしかひなり。料とはうづまさどののり料也。よく牛の事すぐれてしれるよしなり。うづまさどのもすきなるいはれをいはんとて。

女の名までうしの事にて付られける事を云也。名の義古来よりしりがたきよしなり。これを秘伝など云もあれど。それはいかゞとぞおぼえ侍る。誰の人の説にや。この草子はちかきころより。妙寿院などのもてあそび給ひ中院也足の清濁義理を仰らるゝよし也。それを貞徳は中院殿にも妙寿院にもあひてきゝし人なるが。秘伝ともいはれざりし也。此人々ををきての説は。信用しがたし。ある時貞徳のいはれしはしるて義理をつけて見ば。ひざゝちとは。うしはひぎのつよきがよきなれば。ひぎのよきと云事なるべし。さちは幸也。よきこゝろなり。ことつちはことはこつてい也。男牛なり。つちは牛はふとくまろくして。つちのやうなるがよき心也。はふらは牛ははらの大き成がよければ。おほきなるはらといふこゝろか。をと牛は乙牛なり。かくもいはれんとありしなり。それをきゝつたへたる人のひでんなど云よし也。あたりたる説にてもなし。古人の説にてもなきを。いかて秘伝などいはんや。かへりて貞徳を後世にもなみさせん事よからぬ事也。かゝる事の有

事はていとくにあひてくわしくものをきかぬ人の。名高き人なればきゝたるよしをせんために。死後にかく云ことゝもおほし。われかく云事はていとくのひでんなどいはれし事は。のこらず切紙にして證明のことゝもしをきし故也。

うつまさどの のつちに云。信清公也。号レ坊門。又号ニ太秦内府。関白道隆公の後也。

第一百五段（第一百六段）

宿河原しやくわといふところにて。ぼろくおほくあつまりて。九品の念仏を申けるに。外より入きたるぼろくの。もし此御中にいろをし坊と申ぼろやおはしますと。たづねければ。其中よりいろをしこゝに候。かくのたまふは。たそと答ければ、しら梵字ぼんじと申者也。をのが師ながしと申し人東国にて。いろをしと申ぼろにころされけりとうけ給りしかば。その人にあひたてまつりて。うらみ申さばやと思ひて尋申なりと云。いろをしゆゝしくもたづねおはしたり。さる事付き。爰にて対面し奉らば。道場だうじやうをけがし侍へし。前の川原へまいりあはん。あなかしこ。わきさしたちいつかたをもみつぎ給な。あまたのわづらひにならば。仏事ぶつじの妨さまたけに侍べし。といひ定めて二人河原へ出あひて。心ゆくばかりにつらぬきあひて。ともに死にけり。ぼろくと云者。むかしはなかりけるにや。近世に。ぼろんじ。梵字ぼんじ漢字かんじなどいひけるもの其はじめなりけるとかや。世をすてたるにゝて我執がぢふかく。仏道をねがふに似て鬪諍とうじやうをことゝす。放逸ほういつ無慙むぜんの有様なれども。死を

かろくして。少もなづまざるかたのいさぎよくおぼえて。人のかたりしままに。かきつけ侍る也。

抄にいはく。此だんのこゝろは一篇の終りの詞にあきらかなり。

宿河原 のつちに云。撰津国に有。

ほろ／＼ 同いはく。暮露とかくといへども。梵論とかくべきなり。

ぼんじ。かんじ。などいふ名もあれば也。ぼろ／＼のさうし一卷

あり。こくうばうと云もの。身のたけ七尺八寸。力つよし。ゑか

きかみぎぬに。一尺八寸の太刀をはき。ひるまきの八かくばうを

よこたへ。一尺五寸のたかあしだをはき。かみなかく色くろくし

て。ぼろと云うものになり。一人の美女をつまとし。同行三十人。

しよこくをありくといへり。そのゝちに。こもぞうといふもの。

僧ともみえず。俗ともみえず。山ふしとも見えず。刀をさし尺八

をふき。せなかにむしろををひ。道路をありき。人のもんこにた

ちてものをこひもらふ。これぼろ／＼の流也といひつたへたり。

抄にいはく。ぼろ／＼のさうしといふもの有。とがの尾の明恵上

人のかわおそのふくろの中より出たるよしなり。母は名をくれと

云。兄はこくうばう。妻は簾中。弟は阿弥陀坊。妻は同行坊とい

ふがはしめ成よしなり。いづくにもあるものなれば略之。

九品の念仏とは 抄にいはく。なむあみだ仏也。九品のくらゐをた

つるはあみだの御国西方浄土也。もろ／＼のによらいに。念仏あ

れはあみだといはんため也。

いろをしはう 抄に云。ぼろの一人の名也。ぼろは惣名なるへし。

道場 抄に云。仏道とりおこなふ所は。いづくもだうぢやう也。

名義云。道場者肇師曰。修道之場。煬帝勅天下寺院皆名道場。

止曰。道場清浄境界治五住。糠。頭。實相。米。

わきさしたち 抄にいはく。はうばいたちと也。

心ゆくはかりとは 抄に云。こゝろの遣なり。とゝこりおもひしこ

との散しゆくばかりとなり。

ほろ／＼といふもの 抄に云。これより評論のことば也。

ほろんじ 抄に云。ぼろ／＼の名也。名三なり。梵志と云ものは。

名義集などにあり。普門疏曰。梵志此云淨行。劫初種族山野。自

閑。故人以淨行稱之。肇曰。秦言外意。其種別有經書。世々相

承以道学為業。或在家或出家多特己道術。我慢人也。

世をすてたるににてと云より。ぼろ／＼がありさまをかくなり。似て

といふこの字あちはふべし。うへはそのやうにて下がかはるよし

也。

我執とは 抄にいはく。法念処者。法者想行。二陰及有為。諸法也。

此諸皆无我物也。衆生不知之。有主宰計。立我是顛倒云也。

数論外道等立我仏教自元示无我为旨。

かくのごとくなれば。仏道とはうらはらなり。

鬪諍 抄云。諍有四種十誦律云。一鬪諍。二助諍。三犯罪諍。四常

所行事諍。毘尼母云二人共競名鬪。徒党相助名諍。

放逸無慙とは 抄にいはく。仏道をねがふ法度にかゝはらぬが放逸

也。わがつみをも行をもはちぬかむざんなり。

第一百十六段（第一百十七段）

寺院の号がうさらぬよろづの物にも。名をつくる事。むかしの人はすこしもとめずたゞありのまゝにやすく付けるなり。この比はふかく案じ。才学をあらはさんとしたるやうにきこゆる。いとむつかし。人の名もめなれぬ文字をつかんとする。益なきことなり。何事も。めづらしき事をもとめ。異説いせつをこのむは浅才せんの人のかならずある事なりとぞ。

抄にいはく。一だんのこゝろ終りのことばにてこゝろえぬべし。何事もめづらしき事をもとめといふより。評論していへるなり。

第一百十七段（第一百十八段）

友とするにわろき者七あり。一にはたかくやんごとなき人。二にはわかき人。三には病なく身つよき人。四には酒をこのむ人。五にはたけく勇いさまるつはもの。六にはそらごとする人。七にはよくふかき人。よき友三あり。一には物くるゝ友。二にはくすし。三には智恵ある友。

のづちにいはく。此だん朋友に善悪あることを云。ろんごに益者三友。損者三友。とあるにもとづけり。たかくやんごとなき人は。上交すれはかならずへつらふ事あり。万章しやう友をとふときに。長貴をはさんで友たらずといへり。わかき人は血気さかんなるゆへに。陸放翁りくほううが少年の豪英かうえいのまじはりは。同参さんの夜雨にしかずといへる

こゝろあるべし。病なく身つよき人は、寒暑ををそれず。又飲食をもほしひまつにするゆへに。他人をそこなふ也。されどもわれにおゐては、孟襄陽まうじやうやうが多病故人疎ことといへる事おもふべき也。酒をこのむ人は。事のみだれをなしてひが事出来る事おほかり。たけく勇るつはものは。一朝のいかりに身をわすれて。父母のうれへをのこし。暴虎憑河ほうこひょうかの悔くいもあるべし。そらごとする人は。万の事たつへからす朋友信あるは五倫のつね也。よくふかき人は。ひさしくむつびがたし。勢利せいりのまじはりは君子のにくむところなれば。古人これをあま酒のごとしと云。論語にも放時於利而行時多レ怨レといへり。これ皆友とするにあしきもの也。よきものをいはゞ。ものくるゝ友。車馬輕裘けいきうともにやぶるともうらみなからんといふは。子路しりうがねがひにあらずや。くすしをいはば。東坡山谷は、庵安常はうあんじやうをともし。朱文公は。郭長陽くわちやう夏医にまじはり。呉幼清ごうせいは。載同甫さいとうほをしるの類すくなからず。ちゑある友は童蒙どうもうの求に応じ。又たがひに講磨濡沾かうまじゆせんのたすけあるべし。

抄云。四分律親友しんゆう。意者要ス具シテ七法しちほふ。一難レ作能作そく。二難レ与レ能与よ。三難レ忍能忍にん。四ニハ蜜事みつじ。相告あひかたげ。五ニハ互に相覆藏あひかたげ。六ニハ遭レ苦不捨くしや。七ニハ貧賤ひんけん。不レ輕しん。如是七法しちほふ。人能よ行者是なり親善しんぜん友とも。応レ親附しんぶ之を。

やんごとなきともは安楽行品にも。王子大臣官長に親近すべからずといへることく。みちのさはりとなるなり。其人の命はそむかれねば。こゝろよりほかの事どもある也。わかき人はろんごに。をのれにしかざるを友とする事なかれのこころなるべし。病なく

身つよき人は。わがつよきまゝに。人をそこなふ事あり。飲食などもむりにしゐなどずる事なり。酒このむ人のむといはてこのむといふ。少心あるべきにや。のむは養生にもなる事あり。よくはあらねどさのみかいをなさず。このめは長飲などしてひまをつるやすのみならず。酒おほくのむゆへ身心をみだすなるへし。よくふかき人とは。宝積経に。利養をきらへる類也。よきとものうちにものくるゝともとは。いやしき事をかきたりと。古来さたある事のよしを。ていとくかたられしなり。されど四分の難^レ与能^レ与とあるにかなへり。わたくしにかきたるにあらざるべし。こゝには害をなす損友ならぬことをいへば。ものくるゝは益友なり。

第一百十八段(第一百十九段)

鯉^ニのあつもの食たる日は。びんそゝけずとなん。にかはにもつくるものなれば。ねばりたる物にこそ。鯉ばかりこそ御前にてもきらるものなれば。やんごとなき魚なり。鳥には雉^キさうなきものなり。きじ松茸などは。御ゆどのゝ上にかゝりたるもくるしからず。其ほかは心うき事也。中宮の御方の御ゆどのゝうへのくろみだなに。鴈のみえつるを。北山入道どのゝ御覧じて帰らせ給ひて。やがて御文にて。かやうのものさながら其姿にて御棚にゐて候ひし事。見ならはず。さまあしき事也。はかゞしき人のさふらはぬゆへにこそなど。申されたりけり。

抄にいはいく。しれぬ事をあきらめたる段也。

あつものとは 抄に云。順和名 羹とあり。汁の事なり。のつちに云。魚をにかはにねるをにべと云。瑣碎録に。鯉魚膠を墨にすりて。身にさせば。青黒にしてあひすべしと有。そのうへ周詩にも。かめをつゝみやきにし。こひをなますにすといひ。豈其食^レ魚。必河之鯉^{ナランカ}といふ。魯の君より孔子へ鯉魚ををくる事もあり。鯉魚をやんごとなきものといへる。まことに佳魚なり。ねはりたるものにこそとは 抄に云。けんかうか了見也。鯉ばかりこそ 抄に云。あつものゝことにつきて。こひの事をかく也。一転したるなり。

鳥にはきじ 抄に云。魚の事いふつゐてにそのるひなればいふ也。のつちに云。義礼^ニ相見^レ之贄。各執^レ雉^ヲ。大夫執^レ鴈。註。雉取其守^レ介。不^レ失^レ節。鴈^ハ取^ル其^レ候^レ時而行^ラ也。昏礼^ニ納采^レ用^レ鴈。

松茸 同云。本草綱目に。菌蕈^{キンタン}の類おほし。香蕈^{カウタン}とあるは松だけのるひなるべし。たけくさびらを耳と云。日本に茸の字をかくは耳の字をあやまれるなるへし。

貞和集に。有^ニ松茸頌^一。茸^{シヤウ}の字をかきたり。鹿茸の茸の字義をもつてみれば松茸とも可^レ書か。

御ゆどのゝうへ 抄にいはいく。今どきのやうにこゝろえぬれば。不審あり。むかしは御ゆどのゝひろくして。やすませ給ふところにて。御りやうりなどありしとなりと。ある人いはれき。

そのほかとは 抄にいはいく。きじ松だけのほかはとなり。心うきとはよからぬ也。

中宮のとは 抄にいはいく。そのほかのかゝりたるあしき事を云也。

ちうぐう のつちに云。後深草院の中宮也。

抄にいはいく。帝王の妻をちうぐうと云也。即皇后也。 義解云。

謂皇后宮皇太皇太后皇亦云中宮一号中宮。始太皇太后明子為二

大夫人一其時号中宮云云。

北山入道殿 のつちに云。西園寺の実氏公也。ときはゐのしやうこ

くと号す。すなはち中宮の父也。

それ雉と鴈とは。堯舜三代のときより。相見の礼に用るものな

り。舜典に二生一死といへるは卿大夫はいける羔鴈をとり。士

は死するきじをとる也。鴈はときをたかへず行列の次第を乱らさ

るにとる。きじは死時けなげなるにとる。宗廟にそなふるときは。

疏趾となづく。山梁の雉をば孔子もときなるかなとのたまへり。

又きしを花虫と名づけて。舜の衣にゑかき。又禹貢に。羽畎の夏

翟とあるは。羽山より五色のきじを奉りて。其羽を旌旗車服のか

ざりをとる也。これもやんごとなき鳥にて侍る。しかれども鴈

はきじよりまされるゆへに。大夫は鴈をとりて君にまみえ。士は

雉をとりて礼をなす也。このだんにきじをばもちひ。鴈をもちう

ることをばきらふ。これ日本の故実なるべし。しからずは北山入

道殿のこゝろは。君子は庖厨をさくる義ありていへるにや。

さなからとは 抄に云。其かたちながらなり。

鎌倉の海にかつほと云魚は。彼さかひにはさうなきものにて。この

比もてなすものなり。それもかまくらの年よりの申侍しは。此魚をの

れらわかゝりし世までは。はかゝしき人の前へ出る事侍らざりき。

頭は下部もくはずきりてすて侍しもの也と申き。かやうのものも。世

の末になれば。上さままでも入たつわざにこそ侍れ。

抄に云。比段もしれぬことをしらせたる段なり。

かまくら 抄に云。さかみの国也。大しよくわんのかまを埋めた

るによりてかまくら山といふと也。世に入鹿を藤の下にてころ

し給ふかまといふひが事也。日本紀をみれば。たいしよくわん

のはかりことはしたまふ。余人にころさせ給ふなり。かまにても

ころさぬ也。ある説にたいしよくわんの生れ給ふとき。きつね

がまくらがみにもてきたるかまといへり。

かつほ のつちに云。本草綱目。韻書等に分明ならず。海篇心鏡に。

鯉音堅大鯛也とあり。万葉集第九。水江之。浦嶋兄之。堅魚釣

鯛釣。矜及七日。と云り。又しきぶの大輔石上の堅魚朝臣といへ

る人の哥も同第八にのれり。和名集にも鯉魚加豆乎とあるときは。

鯉とも堅魚とも書也。しかればむかしより其なかくれなき魚也。

又此うをゝほしかためて。調味の料とすることもひさしき事なる

べし。けんかうが時代に貴人などの生にて。食事あやしみけるに

や。

第二百十段(第百廿一段)

唐の物は。葉のほかはなくとも事かくまじ。書どもはこの国におほくひろまりぬればかきもうつしてん。もろこしふねのたやすからぬ道に無用のものどもとりつみて。所せくわたしもてくるいとをろかななり。遠きものをたからとせずとも又えがたきたからをたうとまずともと。文にも侍るとかや。

抄に云。このだんは無用のことをいましめたり。むようのものをあつむるがつけくならぬよしなり。

唐とは 抄に云。日本より十四代のおひだ。すべてもろこしといふなり。唐の代にはかきらぬ也。此代別て日本とかよひありし故と也。もろこしと云和訓は。もろくのもの来しといふ義とぞ。からの物はくすりのほか のつちに云。りうなふ。じやかう。こゝう。などの類。日本になきもの也。にんじんも近代は。てうせんより来貢す。ゑんぎしき。てんやくれうには。にんじんも日本諸国の土産に。往々ありといへ共いつのころよりかともうしなひけん。今は日本になし。

ふみともは 同云。伝教大師は一切経をさへかきうつされたり。けんかうも文どもはかきうつしてんといふ。されども中花の書どもほんてうにわたらぬもおほかり。又代々の名儒秀才の撰集。文章たえすあるなれば。みまくほしき事也。

もろこし舟の 同云。尚書盤庚篇。若乗舟汝弗濟。臯厥載。

唐玄宗開元二年。胡人上言。海南多珠翠奇宝。因言市舶之利。又欲往師子国。求靈藥。醫嫗。上命楊範臣往求之。範臣奏曰。彼市舶与商賈爭利。殆非王者之体。胡藥之性。中国多不能知。況於胡嫗。豈宜實之宮掖。此胡人眩惑。求媚。無益聖德。上從之。通鑑

遠き物をたからとせず 同云。尚書旅獒篇。不宝遠物。則遠人格。老子經曰。不貴難得之貨。使民不為盜。

第二百十一段(第百廿二段)

やしなひかふものには。馬牛つなぎくるしむるこそいたましけれど。なくてかなはぬ物なればいかゞはせん。犬はまもりふせぐつとめ人にもまさりたれば。かならずあるべし。されど家ごとにあるものなれば。ことさらにもとめかはずともありなん。其ほかの鳥けだもの。すべて用なき物なり。はしるけだものは。檻にこめくさをさくれ。飛鳥は。つばさをきり。籠に入られて雲をこひ。野山をおもふ愁やむときなし。其おもひわが身にあたりて忍びがたくは。こゝろあらん人これをたのしまんや。生をくるしめて。めをよるこはしむるは。桀紂がこゝろなり。王子猷が鳥をあひせし。林にたのしふをみて。逍遙の友としき。とらへくるしめたるにあらず。をよそめづらしきと。あやしきけだ物。国にかはすとこそ。文にも侍るなれ。

抄に云。上段にもろこしふねにむようのものをもてくるをいまし

めたるにより。此たんに鳥けだものすべて用なきもの也といへり。
やしなひかふものには馬牛 のつちに云。

周礼六畜註。獸可畜者、六豎。牛馬羊犬豕雞。養之曰畜用之曰牲。又曰在野曰獸在家曰畜。与豎同。許救反。

莊子秋水篇。何謂天何謂人。曰牛馬四足。是謂天。落馬首穿牛鼻。是謂人。郭象註云。人可不服牛乘馬乎。服牛乘馬。可不穿絡之乎。牛馬不辭穿絡者天命之固當也。

苟當乎天命。則雖寄之人事。而本在乎天也。希逸口義云。牛馬四足得於天。自然者不絡不穿。將無所用。此便是人心一段事。

抄にいはいく。やしなひかふとはちくしやうの事也。人にやしなひかはるゝ物にわれとはえあらぬによりて。畜生といふと仏書にあり。こゝにやむ事をえぬさへいたましきといひて。ましてむようのものはといひのこしたる筆法也。

犬はまもりふせく のつちにいはいく。金樓子。陶犬無守夜之警。瓦雞無司晨之益。東坡曰。養猫以捕鼠。不可以無鼠而養不捕之猫。蓄犬以防姦。不可以無姦而蓄不吠之犬。

抄にいはいく。犬は用にたつところある故にかくいふなり。それさへかならずかはさずしてかなはぬにはあらず。かはぬにはおとれるよしなり。

家ことにあるものなれば のつちに云。孟子雞鳴狗吠相聞而達乎四境。老子云。鄰國相望。雞犬之音相聞。

はしるけたものは 同云。莊子天地篇。困可三以為得乎。則鳩

鵲之在於籠。亦可以為得矣。在罍繳之中。而自以為得。則是罪人交臂歷指。而虎豹在於囊檻。亦可以為得矣。

司馬遷報任少卿書曰。猛虎在深山。百獸震恐。及其在檻穽之中。搖尾而求食。

東坡詩。三云。鳥囚不忘飛。馬繫嘗念馳。抄に云。慈鎮の哥にも。たれもみなわか身をつみておもふべしいのちはをしきものとしらすや

居家秘用云。籠鳥繫獸為其声狀。悦吾耳目。為我翫樂。令被憂愁。又何不仁也。放之山林。便得自在。何異脫囚。一身自戒。一家不殺。々々々々。一郡効之云云。

生をくるしめて のつちに云。夏桀が無道にして百姓をやぶり。妹喜をあひして瑤臺をつくり。牛飲するをみてよろこび。閔竜逢をころす。又殷の紂が姐己をてうして。婦人の云事にしたがひ。鹿臺鉅橋をつくりて天下の財をあつめ。狗馬奇物を宮室にみちをき。酒池肉林をついやして長夜の飲をなし。熨斗炮烙の刑をおこなひて。人民をやきころし。朝に渉の脛をきり。賢人のむねをさき。はらめる女をさひて其胎内をみる。みなこれ生をくるしめてめをよろこばしむる也。果して桀紂身ほろひて。国家をうしなふ。

抄に云。これは悪人なりといふせうこにいたしたるなり。

王子猷が鳥をあひせし のつちに云。章孝標竹詩。阮籍嘯場人歩。月子猷。看処鳥棲烟。此句らうゑいにのせたり。王徽之字は。子猷。義之の子也。風流の人なり。晋につかへて為黃門侍郎。つねに竹をあひしてうへて。名つけて此君と云。此詩のこゝろは。

其竹間のけふりに鳥のをのづから遊棲するをみて。あひする義也。抄にいはいく。善人の鳥けたものをもてあそひし例を出せり。逍遙は林氏も天遊なりと註したる也。こゝろにまかせて天とともにたのしむなり。

めつらしき鳥 のつちに云。尚書旅獒篇。珍禽奇獸不_レ育_三于_二国_一。抄にいはいく。結句に古語を引てめつらしきとりけた物をよろこぶ事をいましめたり。

白樂天曰。由來_{モトヨリ}尤物不_レ在大能蕩_三君心_一則_ス為_レ害_一。文帝却_レ之不_レ肯_レ乘千里馬去_テ。漢道興_レ穆王得_レ之不_レ為_レ戒_一。八駿駒來_テ。周室壞_ス。至_レ今此物世_ニ称_レ玆_ヤ不_レ知_レ房星之精下_レ為_レ惟_レ八駿凶莫_レ愛_一。

これは奇物をいまして佚遊をこらするをつくる文也。

第二百二十二段(第百廿三段)

人の才能は。文あきらかにして。聖のをしへをしれるを第一とす。次には手かく事むねとすることはなくとも。これをならふべし。学問にたよりあらんためなり。次に医術をならふべし。身をやしなひ人をたすけ忠孝のつとめも医にあらざるべからず。次に弓射馬にのる事。六芸に出せり。必これをうかゞふべし。文武医のみちまことにかけてはあるべからず。これを学ばんをばいたづらなる人といふべからず。次に食は人の天なり。よく味ひをとゝのへしれる人。大なる徳とすへし。次に細工よろづに要おほし。このほかの事ども。多能は君子のはづるところなり。詩哥にたくみに。糸竹に妙なるは。幽玄の道。

君臣これをおもくすといへども。今の世にはこれもちて。世を治る事漸をろかなるにいたり。金はすぐれたれども。くろがねの益おほきに。しかざるがことし。

抄にいはいく。世間の才能の事を云也。終には国政にかけて云也。

人の才能は文あきらかにして のつちにいはいく。六経四書をよみあきらめて。聖賢のみちをしるを第一とす。其道は君臣。父子。

夫婦。兄弟。朋友のあひだにそなはりて。其をしへは。仁義孝弟。忠信にすぎず。其仁義はもとより人の心の中にあり。この心は古今をへだてず。貴賤をわかつたず。きようしゆんも人と異ならず。

人の道をつくしきはむるを聖人と云也。

抄にいはいく。文あきらかとは。四書五経などの聖經賢伝の文にくらからず。こゝろをしる事也。文者貫道の器なれば文あきらかならねはみちはしりがたきことなるべし。聖のをしへをしるをと云事は。俗儒記儒などのたぐひにてなく。道学のためなる事をいふなり。文あきらかなるはひじりのをしへをしらんためとかさねてをしへたり。

次には手かく事 のつちに云。書史会要にのするところ多といへとも。王羲之。趙子昂をはじめ。名をえてすぐれたる人すくなし。其三昧に入ざれば。神妙の名をとる事なりがたし。日本にても弘法。道風。佐理。行成そのほかすぐれたるは多からず。よくする事はならずとも。俗にならぬやうにかきならふべき也。抄に云。次には文あきらかなる次にはと也。文字などの字形に

かゝはりてとかく其道をたてゝ。一芸にする人あるゆへに。宗と
 する事はなくともといへり。かくもんにたよりあらんためと云事
 は。能書だてをせよと云にはあらず。ものかくは文あきらかにな
 るたよりなりとのこゝろなりとなり。

次に医術をならふへし のつちに云。古人おほく医術をまなぶ。晋
 の張花。梁の陶貞白。唐の孫思邈が類ひ。全く医者にはあらず。
 学問のうへに。かねて医をまなぶものなり。宋の東坡夢溪も。よ
 く医をしれり。其あらはず書蘇沈良方これなり。

ちうかうのつとめもいならずは 同云。小学曰。伊川先生曰。病臥
 於牀。委之庸医。比之不慈不孝。事親者亦不可不知医。
 抄に云。忠孝のつとめもといへる事は。身をやしなひて何にかせ
 ん。いたづらにあれと云にあらず。きみにちうをつくしおやかに
 うをせんためなりといふこゝろにかくいへり。

弓射馬にのる事 のつちに云。周礼注。礼楽射御書数謂之六芸。
 五射。一白矢。二参連。三剡注。四襄尺。五井義。五御。鳴
 和鸞。逐水曲。過君表。舞交衢。逐禽左。

六芸 一吉凶軍賓嘉五礼。二雲門。咸池。大韶。大夏。大濩。大武。
 六樂 三五射上在 四五御上在 五象形。指事。会意。諧声。轉
 注。假借。六書。六方田。粟布。裏分。少広。商功。均輸。盈
 朒。方程。勾股。九数。くはしく周礼注疏。小学纂疏にみえたり。
 文武いのみちまことにかけてはあるへからず 抄に云。上にいふと
 ころを評論して云也。世間のわざにても。これはあらでかなはぬ
 みちぞと也。仏者よりこれをも無用といふ人あるをことはりたり。

これも世間のあるべき事なりとなり。

次に食は人の天なり のつちにいはく。帝範務農篇。夫食、為二人、
 天一農為三政本。倉廩實則知礼節。衣食乏則忘廉耻。
 史記酈食其伝云。王者、以民人為天。而民人以食為天。索隱
 曰出管子。論語大全に。此語を引て云。天者人資而生者也。

郷黨篇に聖人飲食の品節をしるし周礼。儀礼。礼記などにも膳
 差の事をつまびらかにす。まことに飲食のあちはひをしりて。よ
 くと、調るときはをのづから口より入病あるへからず。もし口腹
 をほしひまゝにするならば。易牙が溜渥のあへるをしるほとな
 りとも。かへりて子を烹の羹をすゝめて。国のみだれをなす事も
 出来すへし。

次にさいく 同云。唐虞の代には。垂といへる人。百工の事をつか
 さどれり。周礼には孝工記をのせて。もろくのうつは物をつく
 れる法をしるす。後世のさいくといへるは。手にてする事の。つ
 たなからぬを云。あるひは多かき。あるひは樂器をつくるもあり。
 多能は君子のはづる所也 論語子罕篇。大宰問於子貢曰。夫子聖
 者歟。何其多能也。子貢曰。固天縱之將聖。又多能也。子聞之云。
 大宰知我乎。吾少也賤。故多能鄙事。君子多乎哉不也。

抄にいはく。こゝにいひたる事はなくてかなはぬことなり。この
 ほかはいらさることなり。能のおほきは君子のはづかしき事にす
 るなり。よきことにあらぬせうこそとなり。畢竟かく云事。多能
 なれば身心さはがしくてつれづれならぬゆへ也。

詩哥にたくみに糸竹に妙なるは 野槌云。文選、十六。思舊賦序云。

嵇康博綜^レ技芸。於糸竹特妙。

抄に云。詩とは詩經の事なるへし。そのうちの詩も。毛詩のころ有べし。

詩序云。其所^ニ以^テ教^ス者何也。云、詩者人心之感^レ物而形^ニ於言^ニ之餘也。心之所^レ感者無^レ不^レ正而其言足^ニ以^テ為^ル教^ト。其或感^レ之難而所^レ發不能^レ無^レ可^レ擇者、則上之人心思所以自反^ニ而因有^ニ以^テ勸懲之^ニ是亦所以為^レ教也。

古今真名序云。天子每^ニ良辰美景^ニ詔^ニ待臣^ニ預^ニ宴筵^ニ者、猷^ニ和哥^ニ。君臣情由^レ斯可^レ見。賢愚之性於^レ是相分。所以^ニ隨^ニ民之欲^ニ擇^ニ士之才^ニ也。礼樂記云。是故先生慎^下所以^ニ感^レ之者^上故礼以道^ニ其志^ニ樂以和^ニ其声^ニ政^ニ其行^ニ刑以防^ニ其姦^ニ礼樂刑政其極^ニ一也。所^下以同^ニ民心^ニ而出^中治道^上也。

たくみといひ。妙なるといふ文をたがひにしたるものなり。

幽玄のみちとは 抄に云。かすかにふかき心也。あまりけつかうなる道なる上品なれば。上代の人の機には相当也。末世のゆうけんならぬ人のためにはさうたうしかたきよしなり。君臣これをおもくすとは大事にするころ也。君は天子臣は三公などの国政にあづかる人々なり。をろかなるにいたりとは。根本があしからぬ道なるゆへに。をろかなるやうなと也。金は詩哥にたとへ。鉄はいろく道具になるゆへに。益があるなり。このたとへにて詩哥管絃よきみちなれども。益がすくなきことを云也。よきみちなれども。末世にさうたうせぬよしなり。案之に詩哥管絃があしきといふにてはなけれども。末世の人は不相応なりと也。たとへばしや

かによらい。初に頓々の大乘をとかせ給へども。いかにしても人がきくしらでありしゆへに。いやしき漸教を鹿野園にてとき給ふ心なるへし。君臣おもくすれども。時によるべき事なりとの心也。

第二百二十三段(第二百二十四段)

無益^{やく}の事をなして。時をうつすを。をろかなる人とも。ひがことする人ともいふべし。国のため君のために。やむ事をえずしてなすべき事おほし。そのあまりのいとまいくばくならずおもふべし。人の身にやむ事をえずしていとまむところ。第一に食物。第二にきるもの。第三に居る所也。人間の大事此三にはすぎず。うゑず寒からず。風雨にかされずして。しづかに過すをたのしひとす。たゞし人みな病あり。やまひにをかされぬれば。其うれへしのびがたし。医療^{いれう}をわするべからず。葉をくはへて。四の事もとめえざるをまづしとす。此四かげざるをとめりとす。この四の外をもとめいとなむをおごりとす。四の事^{けんやく}儉約ならば。たれの人かたらずとせん。

抄にいはく。上の段の余論也。

無益の事をなして 抄にいはく。無益とはまことの道に益なき事也。少の間の生のうちにと也。おろかなるとは無益といふ事もしらぬ人なり。ひが事とはあやまれる人なり。

国のため君のためにやむことをえすして 抄に云。国のためとは社稷の臣なり。君のためとは宗廟の臣なり。ずいふんのがれんとし

てもやむ事をえぬ事おほく有て。其あまりのいとまにまことの
 ちまなび修行すべき事すくなしとなり。おほしといひて。次の詞
 に略して其しなをあぐる也。

人の身にやむ事をえすして 抄にいはく。上の詞は国と君とのため
 にやむ事をえぬをいひ。これには身のうへにやむことをえぬをい
 ふ也。内外のさはりをあぐるなり。

第一に食物 のつちに云。驚座新書云。居服食三等。湯東谷語
 人云。学者居中等。屋衣下等。衣食上等。食。何者茅茨土階
 非今所宜。瓦屋八九間。僅藏凶書足矣。故曰中等屋衣
 不必綾羅錦繡也。夏葛冬布僅適寒暑足矣。故曰下等。食
 至於飲食則當遠求名勝之物。山珍海錯名茶法酒物々備。庶不
 為凡流俗士。故曰上等。食。

抄にいはく。衣食住の三をあぐる也。やむ事をえすしていとなむ
 事也。存生のうち此三がなくてはかなはぬ也。

うゑす寒からず 抄に云。うゑすは食也。寒からずは衣也。風雨に
 をかされぬは所也。しづかとは此三のほかをもとむればさはがし
 きなり。この三にてまんぞくして外をもとめず。しづかに過すを
 たのしひと云へしと也。

但人みな病あり のつちに云。一切の人すでにかたちあれば疾病は
 なくてはかなはざる物也。故に孔子も齋戦疾の三の物をつしめり。
 此四かけざるを 同いはく。食と衣と居所と薬とを合て四とす。

杜甫詩分類七。多病所須唯藥物。微軀此外更何求。
 抄に云。色身には四相のうちなれば病なくてはかなはぬゆへにか

く云也。衣食住の三のごとくなくてはかなはぬにもあらず。死次第
 やみ次第にてもあらるゝ物也。さるによりて但といふなり。やま
 ひにをかされぬればうれへ忍びがたきと其心にてことほりたり。
 四の事儉約ならば 抄に云。をしかくして評論したる也。仏をくや
 うしたてまつるにも。四事をもつてする事なり。居所 衣服
 飲食 医薬なり。こゝに四あけたるによくかなへり。此四にかぎ
 りたる例證なるへし。

第二百二十四段（第二百二十五段）

是法法師は。浄土宗にはちずといへども。学匠をたてず。たゞ明暮
 念仏して。やすらかに世を過すありさま。いとあらまほし。

是法法師 のつちに云。新千載集第十八。雜哥下。是法法師

のかれてもおなじうきよときくものをいかなる山に身をかくさま
 し

又新後拾遺集第八秋哥に

夜もすから山おろしふきて衣手のたなかみ川にこほる月かけ

抄にいはく。上の段の四の事たりて。しづかにすぐす人の証人を
 いだす也。出家の専にすべき学問をだにたてず。あるよしをいひ
 て。いはんやそのほかはと心をあましていへり。浄土宗にはぢぬ
 とは浄土一宗のがくもんにははづかしきこともなき人にてありし
 だにと也。がくしやうをたてずとは。物しりがほをせずと也。明

くれと云にてけだいなきことをしるべし。やすらかに世を過すありさまあらまほしきとはねがはしきよしなり。

南山云。世界皎潔目之為淨。々之所居名之為士。俱舍道麟云。

宗主義所尊所宗所立之義也。釈籤云宗猶尊主也。如国無二

二王。

学匠トハ説文木工也。旨并斤所_ニ以作器_一也。広韻工匠

第二百二十五段(第二百二十六段)

人にをくれて。四十九日の仏事に。ある聖を請じ侍りしに。説法いみじくして。みな人泪をなかしけり。導師かへりて後。聴聞の人ともいつよりも。ことにけふはたうとく覚え侍りつるとかんじあへりし返事に。あるものゝいはく何とも候へ。あれほど唐の狗に似候なんうへはといひたりしに。あはれもさめておかしかりけり。さる導師のほめやうやはあるべき。又人に酒すゝむるとて。をのれ先たへて人にしゐ奉らんとするは。劔にて人をきらんとするに似たる事也。一方に。はつきたるものなれば。もたぐるときまつ我頭をきるゆへに。人をばえきらぬ也。をのれ先酔てふしなば。人はよもめさじと申き。劔にてきりこゝろみたりけるにや。いとおかしかりき。

抄に云。上段のうち也。学匠だてをしてあしきよしなり。又人に酒をと云より別段にしたるあし。唐の狗に似候なんうへはといひたるにつきて。にたることを終にかく事此だんにかきらず。こ

の筆法あり。

からの狗にとは 抄にいはいはく。あらぬことをいひて事きましたるな

り。道理のきこえたる事にあらず。かくしやうだてをするゆへに。

かゝるむさとしたることもあるといはんためなり。

さるたうしのほめやうやはあるへき 抄に云。評論のことば也。

又人に 抄にいはいはく。からのいぬと云やうなわけもなきことが又あ

ると也。

劔にてきりこゝろみたりにけるや 抄にいはいはく。評論也。

第二百二十六段(第二百二十七段)

ばくちのまけきはまりて。残りなくうちいれんとせんに。あひてはうつべからず。たちかへりつゞけて勝べき時のいたれるとしるべし。其時をしるを。よきばくちといふなりと。或者申き。

ばくち のつちに云。史記魏世家。安釐王四年。予秦南陽以

和。蘇代云王独不見夫博之所_ニ以貴_一梟者。便則食。不_レ便即止

矣。是何王之用_レ智。不_レ如_レ用_レ梟也。注博頭有_三刻_一為_二梟鳥形_一者。

擲_三得_二梟_一者合_二食_一其子。若不_レ便則為_レ余行也。

銅鑑注云。博即局戲。以_レ五木為_レ骰。有_二梟盧雉犢塞_一五者。為_二勝

負_一之采。故人刻_レ一_レ骰為_二梟鳥形_一。得_レ之為_レ上勝也。便宜也。

晋書。袁耽字彦道桓温少時。遊_二於博徒_一。資產俱盡。求_二濟於耽_一。々々變_レ服懷_二布帽_一。随_レ温与_レ債主戲。耽素有_レ芸名。債者不相識。謂

云卿当^レ不^レ弁作袁彦道^二也。遂就^レ局。十万一擲。直上^レ百万耽投^レ

馬絶叫。以^レ布帽擲^レ地云。竟識^レ袁彦道^二否。其通脱如^レ此。

馬はばくちの筭也。馬となづくる事はしやうきの馬のごとし。

抄に云。ばくちの事につきて。ものは時かいたらねばならぬとい

ふ心をしへたり。其かつべきとき其まくべき時をしるが大事也。

こゝにかく書事はかくしやうも衆生の縁熟して時が至りては出て

説法もよし。さなきに利生名聞のために出ればはちをかくよし也。

仏も時成就ならては出世し給はぬ也。さるによりて法王運ひらく

嘉会のととき時の字を釈し給へり。おもふべし。

まけきはまりてとは 抄に云。わがまけ至極して。せにみなになり

てある時少残りたるもつるでにまけんか。とりかへすかにせんと

いふときかちた相手かもはやうつへからすといふを。しらてうた

ぬがよき也。立かへりとはうたんとおもふ心を引かへして。時

がいたりてあひてかつゝけてかつべきと知てうつなと也。其とき

をしるとは相手のつゞけて。かつへき時いたるとしりてやかてを

くをいふなり。

第二百二十七段(第二百二十八段)

あらためて益なき事は、あらためぬをよしとするなり。

抄にいはいく。上の段の心ともをうけて結していへり。

のつちに云。論語先進篇。魯人為^二長府^一閔子騫曰。仍^二舊貫^一如之

何。何必改作。

抄にいはいく。あらためて益ある事はあらためよと云義なるへし。

言外に其心明なり。

第二百二十八段(第二百二十九段)

雅房大納言は。才かしくよき人にて。大将にもなさはやおほ

しける比。院の近習なる人。たゞ今浅ましき事を見侍りつと申されけ

れは。何事ぞとゞはせ給ひけるに。雅房卿 鷹にかはんとて。いきた

る犬のあしをきり侍つるを。中垣の穴より見侍つと申されけるに。う

とましくにくゝおほしめして。日來の御気色もたがひ昇進もし給はざ

りけり。さばかりの人鷹をもたれたりけるは思はずなれど。犬のあし

はあとなき事なり。そらことは不便なれども。かかることをきかせ給

ひて。にくませ給ひける君の御こゝろは。いとたうとき事也。大方い

けるものをころし。いためたゞかはしめてあそひたのしまん人は。畜

生残害の類也。よろづの鳥獸ちいさきむしまても。心をとめて有様

をみるに。子をおもひ親をなつかしくし。夫婦を友なひねたみいかり。

欲おほく身をあひし命を惜める事。ひとへに愚癡なるゆへに。人より

もまさりて甚し。彼にくるしみをあたへ。命をうばはん事。いかてか

いたましからさらん。すべて一切の有情をみて。慈悲のこゝろなからんは。人倫にあらず。

抄に云。此段まさふさの事いひ出ては君王の慈悲をほめて。それ

につきじひの心なきは人倫にあらぬことをいひたり。上段にものはありつけたるがよきといひたる故に。これに其分際くの本位がよき心をいへり。人間は仁心のあるが人なれば。人は人のやうなるがよきよしなり。

雅房大納言 のつちに云。正二位村上源氏。号後土御門。大政大臣定実公男。

才かしくよき人にて 抄にいはいはく。才は才芸也。よき人とは行跡がよき也。才ありても。行跡のよからぬもあればなり。

大将にもなきはや 抄に云。大納言は文官也。大将は武官也。大なる

ごんにて大将をかめるをてがらとする也。いかんとなれば大政官にて。大納言は大臣のした也。近衛にて大将は上にて大臣と相当の官なれば也。

院の近習 のつちに云。此時ゐんの御所三院おはします。後深草。

龜山。後宇多なり。但後深草。龜山はそのかみの法皇か。

近習 礼記、月令、禁近習。注天子親幸者。習者狎也。ちかづきなるを云。

さはかりの人鷹をもたれたり 抄に云。批判の詞也。雅房ほどの人のたかをもつは思慮もなき事なれど。いぬの事は偽りなりとなり。

君の御心はいとたうとき事也 のつちに云。まさふさ犬の足をきりて鷹にかはんとするといへる虚言ならはきみとして浸潤の譖を。

あかす事なき。いかゞあるべけれども。かゝる事を聞てにくめる君のこゝろを。けんかうがほめたるは。齊の宣王のうしをころさるゝを孟子がこの心王たるにたれりと云心にかよへり。宋の哲宗

の。洗手水を蟻にかけさせたまはぬを。伊川が此心四海にをよばさは。王道也と云も是也。

大方いける物をころし 抄に云。雅房の事につきてひろく義論を立て云也。たかもとりなり。それにことりをとらせ犬に鹿をとらせ

などしてたのしむ事也。畜生婆沙曰。畜謂畜養謂彼横生稟性愚癡不能自立為他畜養故名畜生。四教義云。畜生道亦云

旁生此道遍在諸処披毛戴角鱗甲羽毛四足多足有足無足水陸空行互相吞啖受苦無窮愚癡貧欲作中品五逆十惡者感

此道身。文句云。畜生者多盲冥々々者無明也。強者伏弱飲血啖肉怖畏百端四解脫經。稱為血途從相啖邊為名也。

いためたゝかはしめて のつちに云。季氏郈氏か鬪雞の事は。左伝にあり。漢の宣帝。唐の玄宗もこれをこのめり。又言行録には。

王荊公鬪鶉の事をのせたり。けんかうか時分にもさがみ入道そ

うかん鬪狗をこのむ事あり。果してひやうらんの前表にてくはん

とうほろびぬ。むかし東坡いぬをころすことを禁せんとす。有司其法なしと申す。とうばかいはいはく。礼に仲尼の詞をのせて。敝蓋不棄為埋狗也。死してなをその肉をくらはす。いはんやこれをころさんやと云。

ちくしやう残害 同云。残害はそこなひやふるなり。鳥獸虫魚のたがひにくひあふを。ちくしやう残害と云。俱舎にみえたり。

よろつの鳥けたものちいさきむしまても 抄にいはいはく。畜生の事こまかに論じてふびんなることの理を云なり。

のつちに云。莊子に虎狼仁也とあるときはおそろしき虎狼さへ。父子相くらはす。いはんや其外の鳥獸昆虫をや。夜鶴の子をおもひ。巴猿のはらわたをたつもこれなり。桓山の鳥のこゑも子の別をかなしめり。ひつじのひさまつひて乳しからすの哺をかえし楚の純子の死母にうとめるは親をなつかしむにあらすや。猿は獼狙を雌とし。麋は鹿とつるみ。鱒は魚とあそぶ事。齊物論にみえたり。獸に牝牡あり。鳥に雌雄あり。綏々の孤奔々の鶉。同宿の鴛鴦双飛の孔翠比翼の比目。比肩の物にいたるまでみなこれふうふをともなふにあらすや。詩の周南に螽斯は妬忌せずと侍れは餘虫のねたむことはありとしるへし。大鵬は怒てとひ甯成かいかりは乳虎のごとし。越王は怒蛙をみていさむ。かにはいかりてほこをあげ。たうらういかりてをのをたのむ。いきとしいけるもの何れかこのこゝろなからん。

仏印禪師戒殺文。鱗甲羽毛諸品類。衆生与仏心無レ二。只為レ二当初錯用レ心。致レ二使今生頭角異レ水中遊林裏戲。何忍将来充レ二日計レ須臾活捉在レ砧床レ口不能レ言眼還觀。或、槌盪或刀刺牽入レ二鑊湯レ深可レ畏。推レ毛將レ羽刮レ皮鱗レ剖レ背剗レ心猶吐レ氣。美レ君喉レ誇レ好味レ勸レ子勸レ妻同噉嗜。只知恣レ性縱レ無明レ不レ懼陰司毫髮記。命纒レ終、冤業至面对レ二閻王レ争敢諱。從頭一々報無レ差。炉炭鑊湯何処避。勸レ賢豪レ須レ戒忌。莫レ把レ衆生レ当レ容易上。貧レ他レ一儂レ還レ他レ儂。古聖留レ言終レ不レ偽。若能戒レ殺勤レ念仏レ決レ至レ蓮台上品レ会。

すへて一切の有情をみて 抄にいはく。ちくしやうにかきらぬとの

義にて。すべてといへり。見てといへるはころすは勿論との筆法也。

觀世音玄義云。釋レ慈悲者悲者悲名三愍傷三慈名三受念三故拔レ苦念故与レ樂。

のつちに云。すべて一切のうじやうを見て 孔子は。仁者は人をあひすといひ。孟子は赤子の井にいろをみて慌惕惻隱のころあるを仁の端也と云。王陽明が大学の論には。人の瓦石のやぶるゝをみてもおしみ。草木の生茂するを見てはよろこひかれしほむを見てはうれへ。鳥獸の時をえたるをみてはこゝろよく。死るを見てはかなしみ。他人の愁へあるをうれへ。つみなきものゝ死につくをあはれむ。ましていはんや我父母兄弟妻子をや。この故に三歳の嬰兒も父母を見てあひしわらふ。これ則良知は我心にて明なるゆへに。明德といふ。明德はすなはち仁なれば。民をしたしむといへり。人として仁なきときは。形に手足のかけたるがごとし。本心にかたわなる故に。かたちは人なりとも。こゝろはちく類ひなれば人倫にあらず。

第二百二十九段（第三百十段）

顔回は志。人に勞をほどこさじとなり。すへて人をくるしめ。物をしへたぐる事。いやしき民のこゝろざしをも。うばふべからず。又いとなき子を。すかしおとし。いひはづかして興ずる事あり。おとなしき人はまことならねばことにもあらずおもへど。おさなきこゝ

ろには。身にしてみてもおそろしくはつかしく浅ましきおもひ。誠に切なるべし。これをななやまして興ずる事。慈悲の心にあらず。おとなしき人の。よろこびいかりかなしひたのしむも。みな虚妄なれども。誰か実有の相に着せざる。身をやぶるよりも。こゝろをいたましむるは。人をそこなふ事なをはなはだし。病をうくることも。おほくは心よりうく。外より来る病はすくなし。薬をのみて汗をもとむるには。しるしなき事あれども。一旦はぢをそるゝ事あれば。かならず汗をながすは。心のしわざなりと云事をしるへし。凌雲の額を書いて白頭の人となりしためしなきにあらず。

抄に云。上段の余論なり。すべてと有情をみていひたれば。其有情のうち最上の人間をいたみて。慈悲のこゝろなきことを云也。がんくわいがことは先云出して。それよりめいわくするすかたをつふさにおくにかくなり。

顔回 のつちに云。論語公治長篇。子曰盍各言爾志。顔淵曰。願無伐善。無施勞。朱子注云。伐誇也。善謂有能。施亦張大意。勞謂有功。或曰勞々事也。勞事非己所欲。故亦不

レ欲レ施之於人。抄にいはく。発且を古人の詞にてかき出す筆法の一体なり。ものをしへたぐる事 のつちに云。しへたぐるは。せむるこゝろなり。冤の字也。無実の罪をかうふりて。いひひらくことえさるを冤と云。又虐の字をせたぐるとよめり。

いやしき民の志 同いはく。論語云。匹夫不可奪志。

抄に云。すへてとは上下万民と云心也。こゝろざしをめいわくさするが一の苦なるよしをおくへいひのへたり。

又いときなき子をすかし のつちに云。禅録ニ賺レ稚と云語あり。抄に云。又とはいやしき民と云より又となり。こゝにいときなき子の事を云事はおくに義論をいはんためなり。おとなしき人は偽りにてあり。心からの事ならずとすいりやうしておちぬ事もわらはは正直にてめいわくかるなり。

おとなしき人のよろこひいかり 抄に云。みな虚妄とは本分よりみれば。人間のわさみなこまうにてまことの道にあらず。されども実有のすがたに着せぬはなし。わらべがいつはりをまことと思ひて。めいわくがるばかりにもあらずと。一言義論をあげたる也。身をやふるよりも心をいたましむるは 抄に云。民のこゝろざしをもうはふべからずといふをことほりたり。前漢曰。禍莫憊於欲利。悲莫痛於傷心。

病をうくる事もおほくは心よりうく 抄に云。身をやぶるよりもこゝろをいたましむる義をいへり。凌雲のがくの事も。心をいたましめてかたちのかはりたるせうこに出す也。

凌雲の額 のつちに云。世説新語補 十六云。凌雲臺樓觀精巧。先称平衆木輕重。然後造構。乃無錙銖相負。揭臺雖高峻常隨風搖動。而終無傾倒之理。魏明帝登臺。懼其勢危。別以大材扶持之。樓即頽壞。論者謂輕重力偏故也。註 洛陽宮殿簿曰。凌雲臺上壁方十三丈高九尺。樓方四丈高五丈。棟去地十三丈五尺七寸五分也。

韋仲将能書。魏明帝起殿。欲安榜使仲将登梯題之。既下頭鬢皎然。因勅兒孫勿復字書。注文章叙録曰。韋誕字仲将京兆杜陵人。太僕端子。有文学。善属辞。以光禄大夫卒。衛恒四体書勢曰。誕善楷書。魏宮觀多誕所題。明帝立陵霄觀。誤先釘榜。乃籠盛誕轆轤長紐。引上使就題之。去地二十五丈。誕甚危懼。乃戒子孫。絶此楷法。著之家令。又魏書二十一有韋誕傳。

第三百十段（第三百十一段）

物にあらそはず。をのをまげて人にしたがひ。我身を後にして。人をさきにするにはしはず。よろづのあそびにも。勝負をこのむ人は。勝て興あらんためなり。をのが芸のまさりたる事をよろこぶ。されば負て興なく覚ゆべき事又しられたり。われまけて。人をよろこはしめんとおもは。さらにあそびの興なかるべし。人にほいなく思はせて。わが心をなくさまん事徳にそむけり。むつまじき中にたはふるも。人をはかりあざむきて。をのが智のまさりたる事を興とす。これまた礼にあらず。さればはじめ興宴よりおこりて。なかきうらみをむすぶたくひおほし。これみなあらそひをこのむ失なり。人に勝んことをおもは。たゞ学問して其智を人にまさらんとおもふべし。みちをまなぶとならば。善にほこらず。ともがらにあらそふべからずと云事をするべきゆへなり。大なる職をも辞し利をもすつるは。たゞ学問のちからなり。

抄に云。上段に人をくるしむることをいひたるによりて。これには其くるしめぬ本を云也。人にかたんとするよりおこりて。人をくるしむることなればなり。上の余論なり。ものにあらそはずをのをまけて。抄に云。一段の大意を云出す也。のつちに云。曲礼。在醜。不爭。論語。君子無所爭。をのをまけて。同云。老子云。曲則全。枉則直。夫唯不爭。故天下莫能与之爭。

わが身を後にして。同云。論語仁者。己欲立而立人。己欲達而達人。老子曰。欲先民必以身後之。又云。不敢為天下先。故能成器長。

抄に云。しかずと云事は対して云ことば也。されば上段をうけて人をくるしめぬやうにするには。此心もちにしかずと云ころなるべし。

よろづのあそびにも勝負。抄に云。せうぶの事につきて人にかたんとする事のあしきことをしらせたり。

人にほいなくおもはせて。抄に云。せうぶのことをいひたるを道に引かけて。義論するなり。徳とはみちにそむくなり。徳者得なりとて道を身にえたるを云也。

むつまじき中に。抄にいはいはく。これはつねくの事に人にまさらんとする失をいひたり。むつまじきさへかゝればましてうときはとの心也。

はしめ興宴よりおこりて。のつちに云。魏其侯武安侯は。ともに漢帝の外戚にして。名を天下にあらず。酒たけなはなるときに。

灌夫くわんぶか酒失によりて兩人中あしくなり。たかひにうらみをふくみて。天子へうつたへて。魏其侯灌夫はころされぬ。史漢しかんの本伝にみえたり。

抄伝。礼則是筒、泰敬樽節座、理。

人にまさらんことを思は、抄に云。人にまさらんとしてもよき事をいへり。このまさりやうをさてつぎに云也。

みちをまなふとならば 抄に云。まさりやうの義を云也。よのつね勝負のごときにあらず。人にかたんとせぬ心に人にまさらんとの事也。道を学ふと云は。学問はみちをまなぶ事ぞとしらせたり。

善にほこらす のつちに云。論語云。願ホコルコトニ無レ伐レ善。

大なる職をも辞し 抄に云。かくもんのちからのつよきことを云なり。かゝるつよき学問をせよとなり。大きな職とは。官職又は国守など也。利とは利欲也。これほど人のほしがるおしむものゝ。最上なれども。いやとてならず。辞退してとらぬは。みながくもんをしてとらぬ道理をしるゆへ也。されはかくもんほどちからのつよきものはなしとなり。

― 第三百三十一段 (第三百三十二段) ―

まづしき者は財をもちて礼とし。老たるものは。力をもって礼とす。をのが分を知てをよばざる時は。すみやかにやむを智といふへし。ゆるさざらんは。人のあやまりなり。分をしらずしてしるてはげむは。をのが誤也あやまり。まづしくて分をしらさればぬすみ。ちからおとろへて

分をしらされは。病をうく。

抄にいはく。此段は曲礼の文にてかけるとみえたり。上の段に人にまさる事のおしき事をいひたるゆへに。こゝにも物にすゝむかたには失の有事を云なり。こゝには自分に智をもてやむへきよしなり。

まづしきものは のつちに云。曲礼ニ云。貧者ハ不ニ以レ貨財ヲ為レ礼老者不ニ以レ筋力ヲ為レ礼。

― 第三百三十二段 (第三百三十三段) ―

鳥羽トバの作り道は。鳥羽殿たてられて後の号にはあらず。むかしよりの名なり。元良親王元日の奏賀そうがの声。甚殊勝にして。大極殿より。鳥羽のつくりみちまできこえけるよし。李部王の記に侍るとかや。

抄に云。しれぬことをしらせたる段也。

鳥羽殿 のつちにいはく。白川院。応徳三年立ニ鳥羽殿一。

抄に云。鳥羽の作り道と云所の名也。其比の人の鳥羽に法皇の皇居のある時道をあたらしく作りたるとおもふゆへに。それよりさきからの名にて有よしを。証拠を引いていへり。鳥羽殿とは鳥羽院の仙院也。

元良親王 のつちに云。陽成院の御子。

元日そうがの声 同伝。朝賀てうがのときにある事也。

抄にいはく。公事根源にくはしくあり。畧之。元日の賀瑞をそうするを奏瑞と云也。一度にある事なり。

大極殿 のつちに云。拾芥云。大極殿。朝堂院正殿名八省院。

又云。八省院。天子臨朝即位。諸司告朝所。又謂之中臺。

抄に云。大極殿にてそうがある事なり。里大裏になりてはしゝんてんにてあり。大極殿なき故也。

李部王 のつちに云。延喜の御子。式部卿重明親王なり。其あらはし給ふ記録を。李部王の記と号す。しきぶを吏部と云事は。法式をつかさどる者を吏と云故也。行理。行吏。行李。の字みな通用する事音おなしき故也。左伝正義にみえたり。

第三百三十三段(第三百三十四段)

夜のおとゞは東御枕なり。おほかた東を枕として陽氣をうくべき故に。孔子も東首したまへり。寢殿のしつらひ。或は南枕つねの事なり。白河院は北首に御寝なりけり。北はいむ事也。又は伊勢は南なり。大神宮の御かたを。御跡にせさせ給ふ事いかゞと。人申けり。たゞし大神宮の遙拝は異にむかはせ給ふ。南にはあらず。

抄に云。これもしれぬことをあきらめたる段也。

夜のおとゞ 抄に云。禁秘抄に委曲あり。

東御枕なり のつちに云。礼記云。寢時東首。

孔子も東首し給へり 同云。論語郷党篇云。疾君視之東

首。加朝服。拖紳。朱子注云。東首以受生氣也。新安陳氏

云。天地生氣始於東方。或問。疾君視之方東首。常時首當在

那辺。礼記自云寢常當東首矣。平時亦欲受生氣。恐不獨於

疾時為然。朱子云。常時多東首。亦有隨意臥時節。如記云。

請席何向。請衽何趾。這見得有隨意向時節。然多是東首。故

玉藻云。居常戶寢常東首也。常寢於北牖下。君問疾則移於南

牖下。

白河院は北首に御寝なりけり 抄に云。北をいむ事頭北面西とて死

人のねやうなるゆへなり。

又いせは南なり 抄にいはく。ある人の説を挙る也。次にさなき義

をいふなり。

大神宮の遙拝は 抄にいはく。けんかうが或人の説の義を正す詞也。

案之禁秘抄。恒例毎月次第に主上正御心。清涼殿石灰垣に着御に

たつみ向なるよしあり。せうこなるべきか。遙拝とははるかにお

がむなり。こゝにていせを拝し給ふ心也。たとへば国へ下らずし

て京にて。其国の権守などになるを。遙受と云こゝろなるべし。

第三百三十四段(第三百三十五段)

高倉院の法花堂の三昧僧。なにがしの律師とかや云もの。あるとき鏡をとりてかほをつくくくとみて。我かたちのみにくくあさましき事をあまりにこゝろよくおぼえて。鏡さへうとましきこゝちしければ。其後ながくかゞみををそれて手にだにとらず。更に人にまはる事な

し。御堂のつとめばかりにあひて籠居たりとき、侍りしこそ。ありかたくおほえしか。

抄にいはく。四十にあまり年よりたる人のよき心もちをかきたり。

高倉院 のつちに云。後白河院第三の御子。

法花の三昧僧 同云。此云調直定。又云正定。又云正受。主峰疏云。

不_レ受_二諸受_一名_二為_二正受_一。遠法師云。夫称三昧者何。専思_二寂想_一之謂也。思専則志_一、一、不_レ分。想寂則氣虛神朗。氣虚則智活其照。

神朗則無_二幽不_レ徹。斯_一、二、乃是自然之_レ玄符。用_レ一_一而致_レ用也云々。

天台、止觀、略明_レ四種。一常坐。二常行。三半行半坐。四非行非座云云。四種三昧。皆依_レ実相。実相是安樂之法。四縁、是安樂之行。所以_二始末皆依_レ法花。即法花三昧之妙行也。翻譯名義集詳也。

抄にいはく。法花の三昧僧とは常行三昧を行ふ僧也。本尊はあみた仏なり。かゝみさへとはかゝみはとかはなれともそれさへうとましくなりしとなり。さへの字こゝろつくへし。御堂のつとめとは三昧おこなふ法花堂也。おほえしかとは哉なり。すみてよむべし。

抄にいはく。上段の余論なり。三昧僧をいみしくおほえしいはれをのべたり。

第三百三十四段（百三十六段）

かしこげなる人も。人のうへをのみはかりて。をのれをばしらざるなり。我をしらずして。外を知といふことはりあるべからず。されば

をのれをものしれる人と云べし。かたちみにくけれどもしらず。心のをろかなるをもしらず。芸のつたなきをもしらず。かずならぬをもしらず。年の老ぬるをもしらず。病のをかすをもしらず。死のちかき事をもしらず。おこなふみちのいたらざるをもしらず。身のうへの非をしらねばまして外のそしりをしらず。但かたちは鏡に見ゆ。としはかぞへてしる。我身の事しらぬにはあらねど。すべきかたのなければしらぬに似たりとぞいはまし。かたちをあらためよはひをわかくせよとにはあらず。つたなきをしらばなんぞやがてしりぞかざる。老ぬとしらばなんぞしづかに身をやすくせざる。行をろかなりとしらば。なんぞ茲_{これ}をおもふ事茲にあらざる。すべて人に愛樂_{あひげふ}せられずして。衆にまじはるは恥也。かたちみにく、心をくれにして。出仕_{いってつか}へ。無智にして大才にまじはり。不堪_{ふかぬ}の芸をもちて堪能_{かんのう}の座につらなり。雪の頭をいたゞきてさかりなる人にならび。いはんやをよばざる事を望み。かなはぬことをうれへ。来らざる事をまち。人におそれひとに媚_{こぶ}るは。人のあたふる恥にあらず。むさぼる心にひかれてみづから身をはづかしむる也。むさぼる事のやまざるは。命ををふる大事。今こゝにきたれりとたしかにしらざればなり。

抄にいはく。抄に云。三昧の僧のかゞみを見て。をのれが老

かしこげなる人も 抄に云。三昧の僧のかゞみを見て。をのれが老たることをよくしりたるをほめたる儀をかく云也。かたちみにくけれども知す 抄に云。人毎にかへりみずしてあやま

ちあることどもを。一くあげたり。又筆法なり。

但かたちはかゝみにみゆ 抄にいはいく。人の云べきことをまうけて
問をあげて其心をあきらめんためにかく云也。かくのごとく云人
もあるべしとなり。

かたちをあらためよはひをわかき 抄に云。しりぞきやうをしへ
たり。かくのごとくすればすべきやうありと上に云所を。一く
あげてをしへたり。

茲をおもふ のつちに云。尚書大禹謨。念茲在茲。

人にあひけうせられすして 抄に云。人の愛樂するさへみづから身
をしりて。引籠るに。まして人に愛樂せられずして。衆にまじは
るはひが事なりといひたり。いはんやと云よりつりて云詞也。
たゞ衆にまじはるさへあるに。いはんやこびへつらひては。よか
らぬ事の由也。一重一重あけていひたる筆法也。よくく味ふへ
し。

雪のかしら のつちに云。古今に はるの日のひかりにあたるわれ
なれとかしらの雪となるそわひしき

高蟾詩。人生莫遣三頭如雪。縦得春風亦不消。東坡三。馮
顛久已歛残雪。

むさぼる事のやまさるは 抄に云。人におそれ人にこぶる貧心のあ
るは命を終ることをしらぬ故也。無常をだにひしとしらはむさぼ
る心はやむべしと本をたつねていましめたり。

第三百三十五段(第三百三十七段)

資季大納言入道とかやきこえける人。具氏宰相中将に逢て。わぬ
しのとほれん程の事。何事なりとも答へ申さゝらんやといはれければ。
具氏いかゞ侍らんと申されけるを。さらはあらがひ給へといはれて。
はかしくしき事は。かたはしもまねびしり侍らねば。たづね申までも
もなし。何となきそゞろごとの中に。おぼつかなきことをこそ問奉ら
めと申されけり。まして爰許のあさき事は何事なりとも。あきらめ申
さんといはれければ。近習の人々女房なども興あるあらがひなり。
おなじくは御前にてあらそはるべし。まけたらむ人は供御をまうけら
るべしとさだめて御前にてめしあはせられたりけるに。具氏おさなく
より聞ならひ侍れど。其心しらぬ事侍り。むまのきつりやう。きつに
のをか中くぼれいりくれんとうと申事はいかなるこゝろにか侍らん。
うけ給らんと申されけるに。大納言入道はたとつまりて。これはそゞ
ろごとなればいふにたらずといはれけるを。本よりふかき道は知侍ら
ず。そゞろごとをたづね奉らんとさだめ申つと申されければ。大納言
入道まけになりて。所課いかめしくせられたりけるとぞ。

抄にいはいく。此段衆にいてまじらひて不堪の身をしらずして。恥
をかきたる証人にいだすなり。上段の心をうけていひたる也。上
段あまた挙たりけることの中にて。一つ二ついひ余は略しておな
じ心なる事をあらはせり。

資季大納言 のつちに云。法興院撰政兼家公末孫。号楊梅。

具氏宰相 同云。村上源氏。通方卿みちかた孫。通氏卿の子。

わぬし 同いはく。汝なり。吾の字をもわとよむなり。人をさして。

吾子ごしと云も此義なり。俗におぬしと云がことし。

さらはとは 抄にいはく。二人のあらそひをきゝてゐる人々の云也。

はか／＼しき事 のつちに云。ともうち詞也。

そゝること 抄にいはく。正しからぬよしなり。

ましてこゝもとの のつちにいはく。すけすゑのことは也。

こゝもと 抄にいはく。てんちくからに對して日本をさして云。

御前 抄に云。院の御前にて對決せよと也。

供御 抄にいはく。君へもちふるまひ申せと也。

むまのきつりやう 抄に云。此しれぬ事なり。其世に人のいひつけ

てこゝろのしれぬ事をとふなり。或は義理ある事。秘事などいふ

人あり。いかなる心ぞやそのときもしれぬ事なればこそとひもし

つらめ。しられぬ事なればこそえこたへなんだれ。それを今しり

がほに云はいかゞあらん。貞徳も一義つけられし事は有心のしれ

ぬがこゝの理にはかなへり。

大なこん入道はたとつまりて 抄に云。此事には世間にはいへと氣

をつけぬ故なり。

所課いかめしく のつちに云。課は。おほすとよめり。其所作をし

おほするを云。こゝにては。かけにまけて。ふるまひをせられた

る也。

第三百三十六段（第三百三十八段）

くすしあつしげ。故法皇の御前にさふらひて。供御くぐじのまいりけるに。

今まいり侍る供御のいろ／＼を。文字も功能くのもうもたづね下されて。そら

に申侍らば。本草ほんそうに御覽じあはせられ侍れかし。ひとつも申あやまり

侍らじと申しけるときしも。六條の故内府まいり給ひて有房ついでに

ものならひ侍らんとて。先しほと云文字はいつれのへんにか侍らんと、

はれたりけるに。土どへんに候と申たりければ。才のほどすでにあらは

れにたり。今はさばかりにて候へ。ゆかしき所なし。と申されけるに。

どよみに成てまかり出にけり。

抄にいはく。此たんと同心也。

あつしげ 抄に云。伝記末勘。

故法皇 のつちに云。はなぞのゝゝゝ。号ごう秋原あきはら法皇。

本草 同いはく。神農しんじゆんはじめてつくり給ふ。梁りやう陶隱居たういんきよこれを注し。

唐宋たうそうの儒医じゆい。代しろ／＼増葉ぞうやくあり。御膳ごぜんにあがるものを一いつ／＼に本草

に引あはせられば。其氣味能毒。寒熱温涼そらに申所に。相違あ

るましきと云也。

六条の故大府有房 同云。従一位内大臣。和漢の才能書也。村上源

氏通光公の孫なり。

しほと云文字 同云。韻会いんかい。鹽えん余廉よれん切。説文せつぶん。鹹かひん也。従たか二鹵監ろくかん声しやう

古者こしや夙沙しよさ初作しよさ煮ルコト二海鹽かいえん。徐曰じよ。黄帝くわうてい臣也。集韻じふいん。或ある作レ鹵ろく。鹽えん

俗作レ塩えん。非し是。監かん居銜きげん切き従レ二臥鹵ふろく省しやう声しやう。臥ふ五貨切ご伏也。従レ

俗作レ塩えん。非し是。監かん居銜きげん切き従レ二臥鹵ふろく省しやう声しやう。臥ふ五貨切ご伏也。従レ

人臣。取_レ其伏_一也。人臣事_レ君。俯僂也。

何れの偏 同云。文字のへんつくりと云ときは。偏^{ヘンツクリ}旁とかく也。

さはかりにて候へとは 抄に云。推量してしれたるとなり。

とよみになりてとは のつちにいはく。とつとわらはれてといふ心

なり。響^{ヒビク}をとよむとよめり。

秋萩にうらひれをれはあしひきの山下とよみ鹿の鳴覽

柚人は宮木ひくらしあしびきの山の山びこゑとよむらん

抄にいはく。とよみ動の字なり。

徒然草抄 卷八上 終

（付記）

『徒然草抄』の上巻「卷一」～「卷八」を本論集に翻刻しましたが、下巻と合せて全巻を将来刊行したいと考えているので、本掲載は今回で打ち切ります。